次の文章は『落窪物語』の一節である。落窪の君は源中納言の娘で、高貴な実母とは死別し、継母にいじめられて育ったが、ひそかに道頼と結婚して引き取られて、幸福に暮らしている。少将だった道頼は今では中納言に昇進し、衛門督を兼任している。以下は、道頼が継母たちに報復する場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

かくて、「今年の賀茂の祭、いとをかしからむ」
こうして、「今年の葵祭は、たいそう趣があるだろう」と（道頼の従者が）

と言へば、衛門督の殿、「ア さうざうしきに、御達に
言うと、衛門督殿（＝道頼）は、「（女房達と一緒に見物に行かないのは）物足りないので、女房達に

物せむ」とて、かねてより御車新しく調じ、人々の
見物させよう」と言って、予め御牛車を新調し、人々の

装束ども賜びて、「よろしうせよ」とて、いそぎ
衣装もお与えになって、「（祭見物の支度を見た目が）悪くないようにしなさい」と仰って、見物の準備を

て、その日になりて、一条の大路の打杭打た給へれ
して、当日になって、一条大路に（場所取りのための）打杭を打たせなさったので、（道頼の従

ば、「今は」と言へども、イ 誰ばかりかは取らむと思
者が）「今は（もうそろそろ出かける時間でしょう）」と言うけれども、「（急がなくとも）どれほどの者

して、のどかに出で給ふ。
が見物場所を横取りするだろうか。いや、誰もするまい」とお思いになって、のんびりとお出かけになる。

御車五つばかり、大人二十人、二つは、童四人、
御牛車五輛ほどに大人が二十人、二輛には、童が四人と

下仕四人乗りたり。男君具し給へば、御前、四位五
下仕えが四人乗っている。道頼がお連れになっているので、御先導には、四位・五位の者

位、いと多かり。弟の侍従なりしは今は少将、童に
が、たいそう多い。道頼の弟で、侍従だった人は今では少将に、童でいらっしゃった人は

おはせしは兵衛佐、ウ「もろともに見む」と聞こえ給
兵衛佐に（それぞれ昇進していたが）、「（兄である道頼と）一緒に見よう」と申し上げなさったの

ひければ、皆おはしたりける車どもさへ添はりたれ
で、（弟たちとその従者）皆が乗っていらっしゃった車までもが加わったので、

ば、二十あまり引き続きて、
二十輛余りの牛車が続いて、

皆、次第どもに立ちにけりと見おはするに、わが杭

「皆、身分の順に整然と(見物場所に)立ち並んだなぁ」と、(道頼が)ご覧になっていると、自分達が杭

したる所の向かひに、古めかしき檳榔毛一つ、網代

を打った所の向かい側に、古めかしい檳榔毛(びりょうげ)の牛車が一輌と、網代(あじろ)

一つ立てり。

車が一台停まっている。

御車立つるに、「男車の交じらひも、疎き人には

お車を停める際、(道頼が)「男車の配置も、疎遠な人ではない

あらで、親しう立て合はせて、見渡しの北南に立て

(ので)、親しく面と向かって停めて、視界に入る北側と南側に停めよ」と

よ」とのたまへば、「この向かひなる車、少し引き

おっしゃるので、「この向かいにある車、少し動しなさい。

遣らせよ。御車立てさせむ」と言ふに、エしふねがり

お車を停めさせるつもりだ」と(道頼の従者が)言うと、(相手は)強情な様子で

て聞かぬに、「誰が車ぞ」と問はせ給ふに、「源中

聞き入れないので、(道頼が)「誰の車だ」と尋ねさせなさると、「源中納言殿

納言殿」と申せば、君、「中納言のにもあれ、大納

(の車です)」と申し上げるので、道頼が「中納言の牛車であっても、大納言の

言にてもあれ、かばかり多かる所に、いかでこの打

牛車であっても、これほど(停める場所が他にも)多くある所に、どうして「この打杭が

杭ありと見ながらは立てつるぞ。少し引き遣らせ

ある」と目にしながら(牛車を)停めたのか。少し移動させよ」と

よ」とのたまへば、雑色ども寄りて車に手をか

おっしゃるので、(道頼側の)雑色たちが近づいて(源中納言家の)牛車に手をかけ

くれば、車の人出で来て、「など、また真人たちの

ると、(源中納言の)車の人が出て来て、「どうして、また あなたたちは

かうする。いたう逸る雑色かな。

こんなことをするのか。ひどく勇み立った雑色だなぁ。

豪家だつるわが殿も中納言におはしますや。一条の
権門らしく振舞う　自分たちの主人も、（こちらと同じ）中納言でいらっしゃるのではないか。一条大
大路も皆領じ給ふべきか。強法す」と笑ふ。「西
路も　すべてご領有なさるおつもりか。　横暴だ」　と笑う。「西から東へ、（葵祭で
東、斎院もおぢて、避き道しておはすべかなるは」
一条大路をお通りになる）斎院も（あなたたちの横暴さに）恐れて、（一条大路を）避けた道を選んでお通りに
と、口悪しき男また言へば、「同じものと、殿を一
なるに違いないそうだ」と、口の悪い男がまた言うと、「同じもの（＝中納言）と、（我々の）主人を（お前
つ口にな言ひそ」などいさかひて、えとみに引き遣
達の主人と）一緒くたに言うな」　など　口論をして、　すぐに移動させられないので、
らねば、男君たちの御車ども、まだえ立てず。君、
道頼たちの御牛車が、　まだ停められない。　道頼は、
御前の人、左衛門の蔵人を召して、「かれ、行ひ
御先導の人である　左衛門の蔵人をお呼びになり、　「あれを、　指図して、
て、少し遠くなせ」とのたまへば、近く寄りて、た
少し遠くに移動させろ」と　おっしゃるので、（源中納言の車に）近って、　無理矢理に
だ引きに引き遣らす。男ども少なくて、えふと引き
すっかり移動させる。　（源中納言側は）従者たちが少なくて、簡単に　止めさせ
とどめず。御前、三四人ありけれど、「益なし。こ
られない。（源中納言側の）御先導は三、四人いたけれども、「（逆らうのは）無益だ。今回の
の度、いさかひしつべかめり。ただ今の太政大臣の
件は、きっと（大きな）口論となってしまいそうだ。　ともかく、今の太政大臣の
尻は蹴るとも、この殿の牛飼ひに手触れてむや」と
尻を蹴ったとしても、　こちらの御主人の牛飼いに手を触れることはできるだろうか、いや、でき
言ひて、人の家の門外に入りて立てり。目をはつか
ない」と言って、（牛車から離れて、）よその家の門に入って立っている。　目をわずかに出して
に見出して見る。
（大路を）見ている。

少し早う恐ろしきものに世に思はれ給へれど、実

（道頼はこのエピソードによって）少し気が短く恐ろしい者だと世間では思われてなさっているけれども、実

の御心は、いとなつかしう、のどかになむおはしける。

際の御心は、とても親しみやすく、穏やかでいらっしゃった。

東大合格
敬天塾